

# オホーツク海沿岸地域のタンチョウ飛来記録

宇仁義和

〒099-41 北海道斜里郡斜里町本町49番地斜里町立知床博物館

はじめに

北海道東部に周年生息するタンチョウ *Grus japonensis* の営巣状況は1970年代から始められた航空調査により次第に明らかになり、現在のところ十勝、釧路、根室の各支庁管内となっている（正富他1996）。一方、網走支庁管内は繁殖期に航空調査が行われているが、この調査による巣や個体の確認は行われていないが、1982年に小清水町湊沸湖で繁殖成功が1例確認され（正富他1982）、非繁殖個体の観察がしばしばおこなわれている（中川1982、中川1985、森1979）。また網走支庁に隣接した宗谷支庁管内にも湿地や湖沼が存在することから飛来個体の観察事例があると考えられる。

しかし、北海道網走・宗谷両支庁管内のタンチョウの観察記録についてのまとまった報告は無く、当地域への飛来の季節的变化、飛来個体の年齢などが不明であり、定着個体の有無についても明確でない。

そこで、当地域でのタンチョウの観察記録を集約し、飛来場所について若干の考察を行った。



図1. 調査地域

なお本論では網走・宗谷両支庁管内をオホーツク海沿岸地域と表現している。

## 方法

調査対象地域は網走支庁管内と宗谷支庁管内の全市町村である（図1）。調査方法は筆者自身の観察および聞き取りとし、各市町村文化財担当係に観察情報の有無を聞いたほか、野鳥の会会員や写真クラブ会員など観察情報を有していると思われる個人から個別に情報を得た。すでに論文や野鳥の会の会誌などで発表された観察記録については観察者に改めて聞き取りを行った。

収集した情報は観察地、年月日、個体数、年齢および環境である。年齢区分は原則として写真記録を利用し、頭部から頸部に茶色の幼羽が見られる個体を幼鳥、幼羽が見られず初列風切または初列雨覆に黒斑が見られる個体については亜成鳥、まったく黒斑が見られない個体を成鳥とした。幼鳥ではないが成鳥か亜成鳥か判断できない個体は成鳥または亜成鳥とした。写真がないケースでも鳥類標識調査員などの情報は十分信頼できるものとして野帳記録だけで年齢を区分した。

この調査を進めるにあたり網走支庁管内および宗谷支庁管内の各市町村文化財担当課の方々、日本野鳥の会道北支部および北見支部（現オホーツク支部）の会員の方々、湧別カメラクラブの方々には未発表の観察記録を教えていただいた。また小清水町在住の竹田津美氏には繁殖記録に関する証言をいただき、北海道立北方民族博物館の渡部学芸課長には貴重な写真を貸していただいた。この場を借りてお礼申し上げます。

## 結果

収集された観察事例は1972年から96年までの25年間にわたった。

表1. 1972年から1996年までに観察されたオホーツク海沿岸地域のタンチョウ

観察年月日	観察地	個体数・年齢	環境	特記事項
1972/9-10月	小清水町浦士別川	成鳥または亜成鳥2	デントコーン畑、堤防	
1973/3/20	小清水町浦士別川	成鳥または亜成鳥2	ジャガイモ畑跡	
1973/12/2	小清水町裏湧湖	成鳥または亜成鳥2	牧草地	
1977/5/22	斜里町三井	成鳥または亜成鳥1、幼鳥1	牧草地	森1979
1979/5/18	斜里町フンベ海岸	幼鳥2	海岸磯場	中川1985
1980/5/2	網走市能取湖卯原内	亜成鳥2	干潟	
1980/11月	小清水町湧湖	亜成鳥5	牧草地	
1981/4/24-28	斜里町ウトロ海岸	幼鳥1、亜成鳥2	流水上	中川1985
1981/9/13	斜里町トーツル沼	成鳥または亜成鳥2	ヨシ原	中川1982
1982/5-9月	小清水町湧湖	成鳥2、ひな1	ヨシ原	北海道新聞82.5.9記事
1983/5/15	斜里町ウトロ高原	幼鳥2	農家庭	
1984/5-9月	小清水町湧湖	成鳥2	ヨシ原	
1985/4月	浜頓別町クッチャロ湖	成鳥1	氷上	
1985/5/12	紋別市コムケ湖	成鳥1	湿原	1985/5/10オムシヤリ沼で目撃情報
1985頃/4月	浜頓別町クッチャロ湖	成鳥1	湖岸	
1987/6/8	斜里町美咲	幼鳥1	牧草地	
1987/8/30	斜里町トーツル沼	成鳥または亜成鳥2	ヨシ原	湧湖へ飛行、約1カ月滞在
1988/4/11	紋別市花園町上空	亜成鳥1	飛行中	
1990/5/4-6	紋別市コムケ湖	成鳥1、亜成鳥1	河口	
1990頃/6-10月	浜頓別町クッチャロ湖	幼鳥1	湖岸	7-9月頃猿骨沼で滞在
1991/10月	湧別町サロマ湖鶴沼	成鳥または亜成鳥2	湿原	
1992/3/31	湧別町サロマ湖中番屋	成鳥または亜成鳥1	干潟	
1992/4/6	斜里町朱田東	成鳥または亜成鳥1	デントコーン畑	
1995/5/1	斜里町トーツル沼	幼鳥1、成鳥または亜成鳥1	ヨシ原	
1995/5/16-17	斜里町朝日町	幼鳥1	牧草地	
1996/5/19	小清水町湧湖	幼鳥1	ヨシ原	

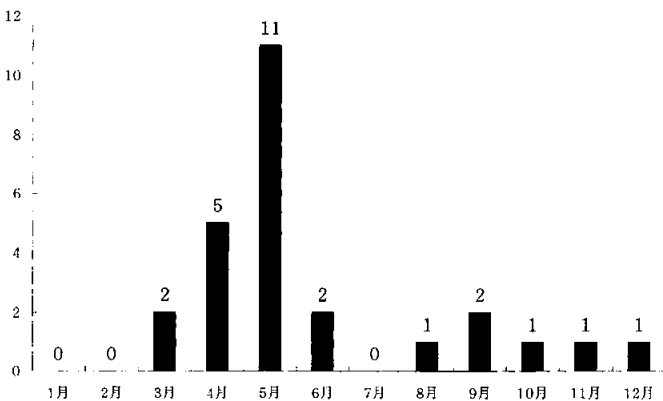


図2. オホーツク海沿岸地域に飛来したタンチョウの月別初認件数

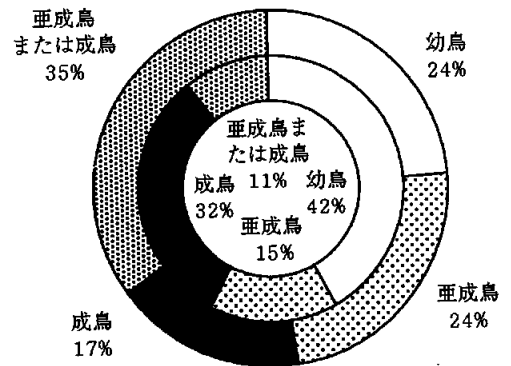


図3. オホーツク海沿岸地方で観察されたタンチョウの令構成 (内側/5月、外側/全体)

観察件数および観察個体数はその年生れのヒナを除き26件46羽となった(表1)。これらの観察は別々の場所で異なる個人が行ったため重複していることが考えられ、とくに観察場所が近接しており、観察日の間隔が近接している2件(1985年4月浜頓別町クッチャロ湖と5月12日紋別市コムケ湖、1992年3月31日湧別町サロマ湖中番屋と4月6日斜里町朱円東)は重複観察が考えられるが、本稿では別々の観察事例として扱った。なお観察個体のなかにリング付個体は見られなかった。

観察場所は、斜里町、小清水町、網走市、湧別町、紋別市、浜頓別町の6市町であった。観察場所の地理的特徴は知床半島西岸に位置する斜里町ウトロ周辺を除くと平野部に限られており、斜里平野で農耕地で観察されたほかは、トーツル沼、涛沸湖、能取湖、サロマ湖、コムケ湖周辺、およびクッチャロ湖周辺の湖沼周辺の地域であり、オホーツク海沿岸に在する主な湖沼のほとんどすべてから観察事例が得られた。

観察地の環境は、湖岸や干潟・河口(23%)、ヨシ原や湿原(31%)、牧草地や収穫後のデントコーン畑(31%)などであり、農耕地での観察も多く見られた。また1件であるが流水上で観察されたケースがあった。

月別初認件数は、5月が最も多く11件(42%)、次いで4月の5件(19%)と春季の観察が多く、この2カ月間で全体の61%を占めた(図2)。また1~2月および7月の初認事例はなく、越冬個体の観察は行われなかった。

全観察個体46羽の令構成は、幼鳥11羽(24%)、亜成鳥11羽(24%)、成鳥8羽(17%)、亜成鳥または成鳥16羽(35%)であった。また5月の観察記録では11件19羽のうち幼鳥が半数近い8羽(42%)を占めた(図3)。

群サイズは、1羽での観察が10件(38%)、2羽が14件(54%)、3羽以上は2件(8%)で、最大のもは80年11月小清水町涛沸湖で観察された亜成鳥5羽の群れであった(写真1)。

観察期間は、1~6日18件(69%)、1週間~1か月程度4件(15%)、1か月以上4件(15%)であった。1月以上の滞在が観察されたのは涛沸湖とクッチャロ湖周辺地域の2地域であった。

繁殖は、1件記録があり、1982年に小清水町涛沸湖で卵及びヒナにより確認された(北海道新聞

1982年5月9日記事)。翌年も同時期同じ場所で2羽のタンチョウが観察され、途中で1羽しか観察されなくなったことから営巣したことが推察されているが、卵またはヒナの確認はされていない(竹田津私信)。

なお、小清水町教育委員会が1987年に発行した『小清水の野鳥』では「昭和53年~54年繁殖」としているが誤りである。

## 考察

本調査によって収集された観察記録は、観察者の密度や知識などによるバイアスがかかった結果であると考えられる。その点を加味すると、オホーツク海沿岸に存する湖沼周辺の地域は観察記録のない場所を含め、いずれも飛来の可能性があるものと考えられる。

繁殖成功の確認がなされ、その他にも成鳥の1か月以上の滞在が観察された涛沸湖については、80年に観察された亜成鳥5羽の群れの出現のあと毎年観察されるようになったという証言があり、営巣の確認もこの3年後になされている。当地域に営巣が行われるためには若齢個体が集団で飛来することが必要なかも知れない。

本調査は観察記録の収集であるので、考察には限界がある。当地域の飛来場所についての生態学的な調査、土地利用状態の調査が待たれる。

## 要約

1. 著者の観察に加え、市町村文化財担当課および野鳥の会会員などからの聞き取りにより網走支庁および宗谷支庁管内でのタンチョウ観察記録を収集した。
2. 収集された観察事例は1972~96年の25年間でその年生れのヒナを除き26件46羽であり、オホーツク海沿岸に点在する湖沼のほとんどすべてから観察事例が得られた。
3. 観察事例の季節は春季の観察が最も多く、5月だけで全体の42%を占め、令構成は幼鳥と亜成鳥を合わせて48%と若齢個体が多く、観察事例が最も多い5月だけの記録では11件19羽のうち幼鳥が8羽(42%)を占めた。
4. 繁殖確認は1982年の小清水町涛沸湖での1件だけであった。
5. 観察期間は1か月以上の観察は涛沸湖周辺地

域で3件、クッチャロ湖周辺地域で1件の合計4件であり、越冬個体の観察事例はなかった。

6. 以上の結果から網走支庁・宗谷支庁両管内のオホーツク海沿岸に点在する主な湖沼とその周辺地域はいずれもタンチョウの飛来場所となっていると考えられた。

#### 引用文献

- 小清水町教育委員会 1987, 小清水の野鳥  
中川 元 1982, 知床半島中央部の鳥類. 知床博物館研究報告第7集p.17-20  
中川 元 1985, 知床博物館第7回特別展図録「知床の鳥」  
正富宏之・安倍誠典・百瀬邦和・松尾武芳・長山清美 1982, 1982年繁殖期におけるタンチョウの分布, 専大北海道紀, 15:163-173  
正富宏之・百瀬邦和・百瀬ゆりあ・松尾武芳・古賀公也・松本文雄 1996, 1995年と1996年の北海道におけるタンチョウの繁殖, 専大北海道紀, 29:123-151  
森 信也 1979, 斜里町管内の鳥類相について. 知床博物館研究報告第1集p.1-10

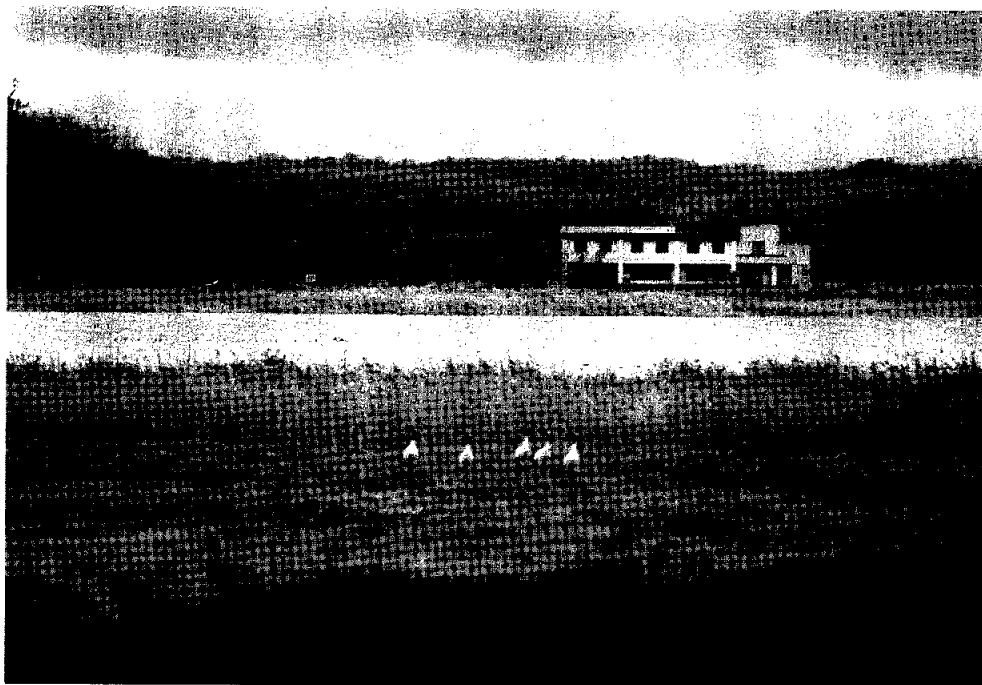


写真1. 1980年11月小清水町湧沸湖畔に現れた亜成長5羽の群れ